

う一度ゴルフブームが到来し、10年後・20年後に私とゴルフに付き合ってくれる世代がもっと増えてくれることを切に望んでいる。

## Peak2Peak

### 非日常を追いかけて

笹木 美樹男

(昭56年卒・中部支部)



「自国の空に見切りつけ、他国の空を仰げども 自国の空に舞い戻り、また他国の空をうらやむ。一冬(こと)に。」

これは古井戸という1970年代に一世を風靡したフォークグループの名曲「四季の詩」の一節である。一方で当時、ノストラダムスの大予言が世間を震撼させていた。定年を2018年3月に迎えた私が思うのは、人生まさにこの詩のとおり。ノストラダムスよりも遙かに説得力がある。詩の詳細はWebを参照されたい。2010年頃から私は画像符号化・理解から人の流れへと研究範囲を拡大し、昨年のFIT2017では移動需要予測の観点から情流理論を提唱した。これは予測を通過し、論文賞候補にもなった。残念ながら受賞には至らなかったが、この「情流」とは人が思い描く環境に価値を見出すフィードバックを主成分とし、物理的人流よりも先行的に発生する。情流を推定・予測・調停することで混雑や一極集中を回避でき、スマート社会に大きく貢献できるのである。一般に人は10個以上の動的環境や事物で構成される。多元的価値を持った事象群において、各事象の明確な嗜好順位を瞬時かつ定量的に決定することは困難である。だがインディ・ジョーンズ

はどのような状況下でも、最適解ではないにしろ、窮地を切り抜ける。漠然解。を時間内に創出する。雪山のスキーヤーや、駅構内の歩行者の擦れ違いも、連休直前のフライト予約なども同様である。この「時間内」という条件がとても重要であり、昨年の米国大統領選の最終勝者を決定した浮動票に相当する成分が必ず存在する。この浮動票を「日常」と「非日常」に応じて誘引することがある事象の快適性ポテンシャルを向上させ、移動需要の一極集中を低減できるのである。だが、日常と非日常も同じ範囲で繰り返すとすべてが日常の一部になる。その意味で、海外旅行に飽きた人間はいずれ宇宙に出ざるを得ない(か、まるきり新しい精神世界を探索する)のであろう。あるいは時間旅行か。だが、私は個人的には時間の逆転はないと諦めている。時間の流れは座標系を考えた人間の妄想であり、万物は状態変化と相互知覚で。時間群。を創出する。物理的時間は莫大な数の変化が集合知として漸近的に収束した結果、あたかも一つの座標軸に見えるのだ。しかも人知を超える高い精度で。ミクロからマクロにいたるまで宇宙の状態変化をビデオのように逆転させるなどあり得ない。中学以来の知り合いで高エネ研准教授の

T氏(彼は、素粒子の自由意思、に関する研究も行っている)に尋ねると、そういう説もあるという。誰かが否定して過去への旅を実現してくれることを期待する。(IoTとバイオの融合で擬似体験は可能かもしれない。)

さて、非日常の獲得には金と時間がかかる。自分の一生や体力を見据えて自分なりに解を探さねばならない。小学生のときにオヤジによく聞かれた。「おまえはさしみとすき焼きとどっちがいい?」「両方!」こんな風では出世はできない。①組織に尽くす、②莫大な利益を上げる、③徹底的に上に気に入られる、のどれか一つが最低必要でこの3つは複雑に絡み合う。私は研究開発で②に貢献できる世界的成果(②)を志向するも、自分の嗜好を大切にすぎた出世の波には乗れなかった。だから御奨めはしない。

香大附属高松小では毎日、鉄棒とドッジボールに明けられていた。そのころの仲間から誘いがあり、附属高松中ではハンドボール部に入った。中1の成績は低迷していたが、フットボールやロックの影響で英語が得意になり、それらきっかけて中3では全国大会出場と高松高校合格を達成した。当時のキャプテンと副キャプテンは県下で指折りの秀才で運動神経抜群

のY氏とW氏である。彼らは中学では珍しいフットボール選手で、夏に日焼けで真っ黒になりながら練習し、第1回全国大会(愛知青少年公園で開催)に四国代表として出場した。Y氏は香川県立高松高校進学後、ロックにのめりこみ、慶応に進学した。W氏は現役で東大合格、電子工学科修士で日立に就職した。さて、私は高松高校でハンドボール部に入部したのだが、高2で学園祭のフットボール演奏にものめりこみ、まだ両立できるほど強くなかった私は大きな悔いを残した。一方で成績は京大を狙えるまでになり、中学時代からの友人T氏(現在、高エネルギー研究所准教授)とはよく物理談義をかわして理学部を志望したが、現役ではそこまで至らず、工学部機械工学科を受験し、不合格(化学、金属、石油では合格できた)。昭和51年京大入試は受験史上稀に見る難解な数学で6問中1問解くのが精一杯。あとは部分点。T氏も理学部を3点足らずで不合格になり、翌年、東大理1に合格。高松高校には校内模試500番台で現役京大合格したM氏のような猛者もいる(トヨタで部長になった)。私は名工大を入学辞退して一浪し、名門近畿予備校で高松高校出身のN氏(京大医学部現役受

験で630点、それでも通らなかった)やA氏(府立医大志望)らと共に鍛えなおし、翌年に電気系学科に入学。当時は京大アメフト黄金時代であった。私はハンドボール部(機械系4年O氏がキャプテン、電気系先輩が4人、3年のK氏が新キャプテン。1年には奇しくも中学全国大会同期出場のW氏がいた)に入部して七帝戦や早慶との交流試合にも同行させていただいたが、体がついていけず、夏合宿でへばって退部。しばらくバイクやバイク(家庭教師や高島屋屋上ビアガーデンウェイター他)に明け暮れた。が、一念発起してこんべいとうと持久走同好会に入部。再び、フットボールとマラソンに注力した。学内駅伝大会(宝ヶ池)やマラソン大会(滋賀県瀬田唐橋)、京都教育文化センターのコンサート(バンドの中心SS氏は現在、東大医学部教授、AH氏は日本郵船重役)他、とバイクで非日常を追い求める日々...。1978年夏、京大電気系S52年入学の三人(大岡、笹木、新田)で北海道3週間バイクツーリング。11月祭は法、経、他学科の先輩同期・後輩らと存分に謳歌した。1980年プラズマ核融合で世界的に有名な板谷研究室を志望し、岡田氏、坂入氏、名村氏、藤井氏らと共に配属。その後、日本楽器

製造に内定し、何とか留年せずに就職。舞台は浜松へ。

厳しくも楽しい技術者のもと、電子楽器設計・研究に従事させていただき、1984年にはヤマハ豊岡工場でマルチメディアの研究開発に従事。月2回ほど東京旅行する繰り返しから脱却すべく、板谷教授から推薦状をいただき、1985年8月に東大大学院受験を決意。夏休み明け、応用研究所社員が出社後、突然長期有休で欠勤した。彼は町田市のアパートに車で行き、籠城して一心不乱に勉強していた。冷房も無くとても暑い夏、ラジオでは日航ジャンボ事故が繰り返し報じられた。ときおり、窓を開け、風に当たっていたが試験前日、あまりに熱いので御茶ノ水にホテルを取った。両手に旅行鞆いっぱい詰め込んだ参考書とファイルを持ち、渋谷駅前を移動する20代の男は、喫茶店でも受験準備をしていた。残業の合間を縫って要点はキングパイプファイルにまとめてきた。その最終版の1冊を試験当日も持ち歩き、本郷の3号館前で見直した。たぶん同期の誰かがその姿を見ただろう。東大は他大学や社会人に対してオープンであった。T氏から送ってもらった過去の問題集（大学から有料公開）3年分を夏休みに解いた。傾向は東大赤本（弟か

らもらった）とほぼ同じ。双方向台車からのボール発射など。東大電気系大学院は定員の半分は内薦で決まる。あとの半分を推薦されなかった学生と一般受験者で争う。私は基礎科目（数、英、物）で8割、独語は6割、専門科目は超難しく、5割以下の出来（持久走同好会1年先輩のN氏の言った通り）。合格はT氏から電話で知らされた。早速東大に車を飛ばし、夜にこの目で確認。合格後、上司・所長に相談して、2年間無給休職へ。授業料免除や奨学金＋残業代の貯金＋予備校教師で生活。留学中は毎日最前列で講義を受講し、2年後規定科目の3倍、単位数2倍を全優で卒業した。修士論文のタイトルは「自然言語に基づく画像生成システム」プラグマティクスに基づく独自の人工知能理論を展開した。すべてやりたいようにやらせていただいた藤崎博也先生に多大なる感謝をせざるを得ない。復職後はマルチメディア符号化MP3に従事。1989年2月結婚。湾岸戦争で景気に陰りが出て研究費縮小になり、転職を決意。1991年11月日本電装入社。ロボット用3次元視覚認識装置の研究開発を開始。MP3国際合会に十数回出張し、ISO国際標準化の海外経験を積む。主要電気

メーカーの方々とMPEG7、MPEG-21に関する日本提案をまとめた。モバイルアドホックグループを立案して議長を1年務め、海外の技術者との交流経験（パリやシンガポールでのデモなど）も重ねた。故板谷良平教授の言葉「それぞれの大学には役割がある。どちらの同窓会でも堂々と参加するとよい。」が胸に残る。提案の一部が国際規格化されることを確認し、2003年12月ワイカロア合合を最後にMPEG-21での提案活動はひとまず終了。2004年3月の1か月休暇を契機にスキューバダイビング（東大修士時代に与論島でライセンス獲得）とスキーを再開。セブやユングフラウへ。子育てが終わり掛けたころでもあった。2007年6月ITST 2007（ニース）で発表し、Best 10 of High Notesに選ばれた。そのとき、Sophia Antipolice, Inria, IDIAP, EPFLなどを訪問して世界に名だたる研究者や技術者、業界人とお会いすることができ、大変よい経験になっている。

2014年3月カナダWhistler-Blackcombにて2度目の海外スキー。稀にみる快晴。最高のスキーをPeak2Peakに楽しんだ。9月にはITSS世界会議（デトロイト）で3件発表。ここまでは絶好調だったが、睡眠不足と過労で10月

31日に突然入院（大動脈解離）。予約していたモルディブ・クルーズダイビングは流れた。3か月後、職場復帰。体力回復に努め、2017年3月3度目の海外スキー（カナダ・バンフ）、7月もう一生無理かと諦めていたモルディブ・クルーズダイビングで至高の魚影（マント、サメ他）を体験。9月FIT2017で「情流理論」が論文賞候補に。10月にはITSS世界会議で移動需要予測を発表。2018年1月音楽活動再開、知立市で自作曲他2回演奏。いつ死んでもいいように日々、非日常を追い求め続けている。一度死にかけたら何でもできる。家族には心配かけたが、3月に無事定年を迎えた。だが、ここで隠居できるほど時代は甘くない。次の5年はキャリアパートナー（嘱託）、その後、現在任意団体であるMusic Scene Researchを起業し、小説家やクリエイターも視野に入れる。少なくともあと10年は非日常を追い求める日々になりそうだ。